

HP掲載用

平成22年度第2回地域教育ネットワーク会議 記録

1 日 時 平成22年10月18日(月) 14:00~16:00

2 会 場 県庁附属棟302号室 303号室

3 出席者 委員 21名(欠席2名)
事務局12名

4 内 容

(1) 開会行事

(2) 報告I(事務局から)

- ・ 地域教育部会
- ・ 家庭教育部会

(3) 分科会

[地域教育部会](司会 会長)

(1) 各団体等の取組について(情報交換)

(学校支援地域本部事業の取組について委員から広報誌が提供される。)

○ 住吉地区の学校支援地域本部には人材バンクが整備してあるのか。それは他の地区でも共有できるものなのか。

→ 住吉地区内の小中学校で共有化された人材バンクがある。同じように、今年度からは、大淀中、大宮中校区でも事業が始まったので整備されているのではないかと。

○ 県立宮崎農業高等学校の概要について委員からパンフレットが提供される。)

- ・ 県内農業を教えている高校が9校ある。
- ・ 本校においては、地域農業を重視した教育を実践している。
- ・ 生徒たちは、商工会議所と連携の下、朝市にも自分たちが作り上げたものを出品している。このように地域に出向くことで、地域に多くのことを学ばせていただいている。将来の日本の農業に貢献できる子どもたちを育成していきたい。

(2) 各部会関係事業の進捗状況の説明

(事務局から学校支援地域本部事業、放課後子ども教室推進事業について)

○ 放課後子ども教室の今後の教室の増加等の見通しはどうか。

→ 今年88教室であり、次年度は市町村への調査によれば99教室の予定である。当初の文科省の計画は、全小学校区に配置する予定をしていた。現段階では、県教育委員会としてもその目標に添って考えており、今後ゆるやかに実施教室が増えていくのではないかと考えている。

○ 放課後子ども教室は、公民館でも取り組んでいると思うが、学校と公民館等での実施の割合はどれくらいか。

→ 放課後子ども教室は当初文科省の方針として、本事業の趣旨である安全・安心



な居場所づくりから学校での実施が望ましいという話もあった。実際には、学校内での実施が約8割で約2割が公民館等での実施である。

(3) 意見交換「各関係者の連携協力」について

(今回は、「各関係者の連携協力はどうあるべきか」を導き出すために、課題解決の手法を取り入れた協議とした。手順については、以下の通りである。)

- ① 「期待される連携協力の姿（在り方）はどういうものなのか。」
- ② 「現状はどうか。」
- ③ 「①と②の差（問題点）を明らかにする。」

- 組織間の連携が必要である。どのような機関（組織・人材）がどのような役割・活動をしているのかを知らないために、連携が進まないのが現状ではないだろうか。
- 人・もの・金・情報を、いかに学校にも地域にもプラスになるように構築するかということが大切であり、それらを共有するようなシステムづくりが必要である。シンガポールでは、学校長が資金についても地域から集めてくる努力をしており、これからは、そのような発想も必要ではないかと思う。
- 資料（文科省の次年度の概算要求案）について
 - 現在、社会教育に関する国の事業は学校支援地域本部事業、放課後子ども教室推進事業、それと家庭教育の事業があるが、それを一つにまとめたもので、あくまでも文科省の現段階での案であり、各事業の事業内容は、今までと同様ではないか。
- 現段階において、放課後子ども教室の実施状況も他の都道府県によって違うようである。ある県では放課後子ども教室は実施しておらず、放課後児童クラブのみ実施しているようだ。
- 放課後子ども教室推進事業と学校支援地域本部事業のコーディネーターの兼務についてはどうか。
- 両事業に関わり取り組むことで情報を豊富に得ることは有り難いが、業務としては多忙である。
- 住吉地区は、地域の老人クラブや自治会がバックアップし、放課後子ども教室についてもすばらしい取組ができているのではないか。
- 期待される連携協力の姿とは、子どものためになる取組の姿である。
- 青年団として、イベント等を実施したいと考えているが、なかなか学校は青年の組織を信用してくれていないのではないか。その対応としては、事前に社会教育関係団体として登録し、その一覧を作成していれば、気軽に学校も信用を持って関係ができるのではないか。
- 現在、地域の情報を得るために、市民活動センター、文化センター、社会福祉協



議会、ボランティアセンター等に電話で情報を収集するようにしている。また、それぞれのホームページも参考にしている。できれば、それぞれの団体から、例えば、エコ関係、昔遊び等の関係情報をどしどし発信していただければ利用する側としては有り難い。

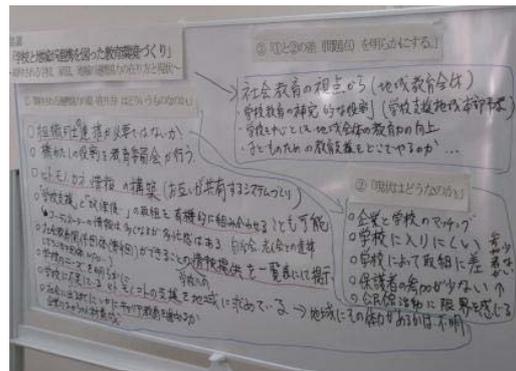
- レクリエーション協会として、イベントを学校に提案してもなかなか受入がない。福祉体験に関しても、毎年同じ学校が取り組んでいる状況である。また、多くの保護者においては様々なイベントについての関心が薄い。

まず、学校のニーズがはっきりしたらその後の連携がうまくいくのではないか。

- 家庭ではしつけを、学校では教育を、地域ではみんなで育てるといった本来のそれぞれの役割を果たしていけばいいと思う。学校と地域のマッチングは実際取り組もうとしても難しいところもある。学校から要求した場合、果たしてそれに地域が対応できるのか。もちろんその逆もある。
- 自治公民館関係者としては、連携した取組があまりないのを反省している。しかし、現実的にはリーダーだけが頑張っていて、公民館で取組をしても地域の方々は活動になかなか参加しない。保護者は任せっきりの部分がある。地域にリーダーはいるので、これから学校教育とも積極的に連携していくようにしていきたい。
- 農業高校における学校と地域との双方向の取組事例についてお聞きしたい。
- 子どもたちの多くは、最初はほとんど農業のことについて知らない状況もある。

そのため、将来の成長を信じながら教育している。学校としては、子どもたちにどうキャリア意識をもたせるかが大切であり、そのため企業との連携が必要であると考えている。

企業の方からどのような人材を求めているかを発信してほしい。教師も知識としては知っているが、実際OBの方々から話を聞くと子どもに与える影響は素晴らしいものがある。私たちも企業任せにならないように、子どもの実態に合わせて取り組んでいる状況である。



[家庭教育部会] (司会 副会長) (A・Bの2グループに分かれて協議)

(1) 意見交換「各関係者の連携協力」について

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ① 「期待される連携協力の姿(在り方)はどういうものなのか。」 ② 「現状はどうか。」 ③ 「①と②の差(問題点)を明らかにする。」 |
|--|

(グループA)

- 社会教育関係団体等はそれぞれの活動しているが、連携がなかなかとれていないのが現状である。例えば、各団体の長が集まる会議をすれば、下部組織にまで連携の輪が広がっていくと思う。
- 婦人会等、託児を依頼すれば、イベント等で対応していただけるが、実際はその

取組の存在を知らないために利用できない状況もあるのではないかと。

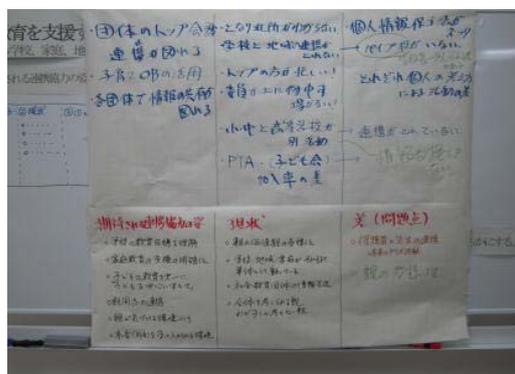
- 子育てに関しては、子育てOBとの連携も必要である
- 各団体のもつ情報を交換したり、公開できるようにになればいいのではないかと。しかし、互いに遠慮があるのが現実である。
- 問題を抱える切実な家庭への支援をしたいが、隣近所でも親しくしていない状況がある。地域離れや子育て活動離れをなくしていくことが必要であると思う。
- 実際に子育て支援に関わろうとしても、昔と違って個人情報保護の立場から、立ち入れない場面もある。
- 確かに以前は、切実な家庭への支援もしやすかったが、現在は、名前も教えてもらえない状況もある。
- 小・中学校のPTAと高校のPTAとの連携も必要であると思う。校種を越えて生徒指導など連携することが必要である。
- PTAの連携に関しては、行政としての所管が違うと難しい。宮崎市PTAと宮崎市教育委員会との連携はできるが、高等学校PTAとは難しい。何らかの連携するしかけをすることで輪が広がっていくのではないかと。
- 学校と地域との連携が図れないのは、連携を図るパイプ役がいらないからだと思う。



(グループB)

- 学校の教育目標を家庭や地域にしっかり理解していただくことが大事だと思う。
- 家庭教育の支援の在り方を具体的に明確化する必要があると思う。
- 「子どものために」ということを第一に考えて、子どもを中心に据えて連携を図ることが望まれる。
- 親同士の連携も必要ではないかと。
- 子育て(家庭教育)の重要性について、親が気づける環境づくりが必要ではないかと。

- 保護者の本音(弱音)を受入れられる環境づくりが必要である。
- 親の価値観の多様化が見られており、理解を図るのが困難な状況がある。
- 現実的には、学校・家庭・地域がそれぞれ単体として動いている面がある。
- 社会教育関係団体の活動については、やはり発信も含めて情報不足の面がある。
- 社会全体を考えられる親と残念ながら我が子のことしか見えない親もいることが現実である。



- 本来はPTAとしての活動だと思うが、保護者と教師との連携不足である。
- やはり親の多様な考え方、価値観の多様性に対応できないのが問題ではないだろうか。

5 報告Ⅱ

- ・ 地域教育部会（事務局から）
 - ・ 家庭教育部会（事務局から）
- 今回、問題解決策を明らかにする方法としての話し合いであったが、委員の方々には時間が足りなかったのではないかと思う。できれば、最初の「期待される連携協力の姿（在り方）はどういうものなのか。」については、自由な発想で数多くの意見が出てくれば良いと思う。



そして、「現状はどうか。」を出していけば、おのずと問題点が分かる。この一連の思考を通すことで問題解決策が明らかになるのではないか。

今後、またこのことについて考えていただくのであれば、子どもたちをこのようにしたい、子どもたちにはこのように育ててほしいこと等を意識して考えていただければよりよい意見が出てくるのではないか。